

氏名(本籍)	なかまえごろう 中前吾郎(和歌山県)		
学位の種類	博士(法学)		
学位記番号	博乙第1,375号		
学位授与年月日	平成10年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	初期毛沢東思想研究		
主査	筑波大学教授		三石善吉
副査	筑波大学教授	法学博士	進藤榮一
副査	筑波大学教授		安藤正士
副査	筑波大学助教授	文学博士	堀池信夫

論文の内容の要旨

本論文は、マルクス主義受容以前の初期（1921年7月共産党入党以前）毛沢東の思想を、師範学校生徒であった毛沢東の講義ノート、世間向けに書かれた毛沢東の処女論文「体育の研究」、教科書『倫理学原理』に書き込まれた個人メモ、私信、あるいは新聞に発表された論争文といった性格の全く異なる第一次資料を使って分析した結果、その全ての資料が、従来の通説である「マルクス主義アプローチ」、あるいはその通説に対抗する「伝統思想的アプローチ」から浮かび上がってくる毛沢東像とは全く異なった、新しい初期毛沢東像、即ち「進歩的ロマン主義者」・毛沢東を指し示していると言う新見解を提示した論考である。以下、各章の要旨を述べる。

「序章」は「問題の所在」と題され、冒頭に本論文の分析の視座が示される。つまり、従来の研究を大別すれば、先ず、初期毛沢東をやがてマルクス主義者に転身していく過程と捉える「マルクス主義的アプローチ」であるか、あるいは伝統主義者からマルクス主義者に転身していくとみる「伝統思想的アプローチ」の何れかに分類され得る。つまり、理論的に押し詰め単純化すれば、近代中国に対決を迫ってきた「西洋の衝撃」に対して中国を西洋化させるのか、逆に反西洋を標榜するのかのいずれかの道であるが、初期毛沢東の諸文献を仔細に検討するに及び、毛沢東はこの二つの道のいずれをも取らず、第三の道を模索しているとする。毛沢東のこの第三の道とは、伝統と近代の相克、要するに伝統を批判する場合にも伝統性に固執しつつなお西洋を摂取し、にもかかわらず西洋を批判しつつその批判の根拠を西洋に求めるといった極めてアンビバレントな様相を示している。こういった「世界苦」を背負いつつ執筆された初期毛沢東の「書き物」から浮かび上がってくる特徴こそ、「マルクス主義的アプローチ」とも「伝統思想的アプローチ」とも異なった、「進歩的ロマン主義者」毛沢東像に他ならないと言う。以下の各章は、若き毛沢東の書き上げた諸論文をその論文の性格に応じて分類しつつ詳細に分析することで、この分析視座が妥当性を持つことを六点、つまり六章にわたって検証していくと言う方法をとる。

第一章は「『講堂録』－伝統と近代の相克」と題される。湘南第一師範学校教授、楊昌済・袁仲謙の講義に対する毛沢東の講義ノートの中から、同じ時期の毛沢東の他の関連文献を手掛かりに毛沢東個人の感想・思想が抽出され、この手続きを経て後毛沢東独自の思想が分析される。結論として毛沢東は西洋と中国の伝統の双方を批判する際、一方では「現在」を重視する自我論は西洋的「ロマン的自我」に他ならないが、他方では伝統的な「聖賢と愚民」観に立って、「救国」を「英雄」に託すると言う毛沢東の中国救済の処方箋が引き出された。

第二章「体育の研究」－伝統批判の伝統性。従来の研究では、「体育の研究」（1917年4月、『新青年』所載）

から「主観能動的」な「意志の強調」が読みとられたが、本論文では、①徳育・知育を重視する儒教的価値観を伝統儒教的な心身両面の同時完成論で否定している事、②経書の異端的解釈による正統教学批判を行なって双方の中間地点に立っている事、③伝統による伝統批判の目的は政治世界の法則性を知らうとする事である。という三点を導き出し、従来の通説である「意志」・「主観」の重視も、実は「法則性への意志」なのであったとの新見解を提示した。

第三章『倫理学原理』批語－反伝統の西洋摂取。『倫理学原理』批語とは第一師範楊昌濟教授の修身のテキスト『倫理学原理』（パウルゼン著。約十万字）に書き込まれた毛沢東のコメント一万二千字を言う。従来パウルゼンは「二流のカント学者」と規定されていたが、本論文はパウルゼンの伝記・著作に当たって、宗教的世界観と唯物論の調和を説くヒュームの経験論者と規定した。毛沢東はパウルゼンに触発されて倫理学には「個人主義（個性化されたロマン的個人主義）」と「現実主義（現在重視の思想）」とがあると述べ、この二原理によって伝統的価値（聖人、大同等）を否定し「いまここ」を重視する思想を導き出し、かつパウルゼンの影響の下に自然法則に従うが故に個人の意志の自由が在ると説いた。つまりここでは毛沢東は西洋による中国の伝統批判者として立ち現れている。

第四章 国際関係論－西洋批判の西洋性。『湘江評論』（1919年7月～8月の創刊号から第5号迄、全41編）中のパリ講和会議に関する毛沢東論文は、パリ講和会議後の強権の世界を民衆の大連合によって打倒しようとする。本論文はこれを旧外交、新外交のウイルソンとレーニンの三者の対抗関係をリアリズム（マキアベッリの現実主義）、ユートピアニズム（ウイルソンの理想的国際主義）、ロマンティズム（レーニンの理想主義的な世界の共産主義連邦化）の三理念によって分析し、毛沢東は「文化的世界主義」から「民衆の大連合」による温和な「強権打倒（国際的、国内的な）」を説き西洋近代の民衆国家主義を克服しようとする「政治的世界主義」に転化したと結論づけた。つまり毛沢東をリアリズム的認識、ユートピア的目的を持った「進歩的ロマン主義者」として規定した。

第五章 女性解放論－反伝統かつ反近代。1919年11月14日長沙で一人の花嫁が嫁入りのその日剃刀で首筋を切って自殺した。11月16日から10日間の間に『大公報』紙の「館外選述員」であった毛沢東は花嫁自殺に関する論文を9篇書いた。この毛沢東の論争文から、家族主義的婚姻制度への反逆を要請する近代的人格とロマン的人格の双方が存在する事、伝統的価値や西洋的価値（資本主義）を否定する恋愛中心の夫婦関係を主張している事、民衆の内部に潜む儒教的迷信を批判している事という三点を導きだし、この立場は女性解放論からする全面的・急進的変革を要請する「反伝統かつ反近代」の立場である事を証明した。

第六章 自治運動論－近代批判の近代性。1919年5月4日北京の五四運動に呼応した湖南長沙の毛沢東等は具体的な目標として日本商品焼却運動を起こし、これを弾圧した湖南省長張敬堯追放運動となって爆発する。毛沢東は「駆張」運動・自治運動は湖南の「根本改造」であり、かつ「目前の環境」に対する有効な手段であるとのリアリズムに立つ。1920年6月省長・張は駆逐され、譚省長の「革命政権」が復活する。かくて毛沢東は「湘人自決主義」を唱え「湖南自治運動」を興し、憲法を制定して「湖南共和国」を建設しようとするが、1920年10月22日のデモでは千人弱しか集まらず毛沢東は失敗を自認する。毛沢東の思想にはユートピアを未来に設定する未来志向と政治的リアリズムの契機を含んだ「進歩的ロマン主義」が見られる。

終章は「展望」と題され、第一章から第六章までの総括として、初期毛沢東思想の特色は、中国の伝統の崩壊、西洋近代の侵攻という事態を迎えて、伝統的にしてかつ西洋近代的思考方法をとつつ、伝統中国と近代西洋の双方を否定して「第三の道」・「進歩的ロマン主義」の道を模索するものであったとした。また毛沢東の思想の特色として初期の「体育研究」から「持久戦論」、大躍進・文化大革命に一貫して「マルクス主義」的「主観能動性」が見られると言う「旧説」を批判し、初期毛沢東思想の「進歩的ロマン主義」の思想的基盤の上に、「主観能動性」を帯びたそのような特徴・限界をもってマルクス主義が受容されたのであると結論付けた。

審査の結果の要旨

本論文は「初期毛沢東」を従来の学説とは全く異なった「進歩的ロマン主義」の観点から捉えた論考で、それぞれの章に旧説を覆す優れた視点が見られる。

①受講ノート「講堂録」から毛沢東の思想を生み出す「ロマン主義的世界苦」を引き出したこと（旧説はこのノートから伝統主義や西洋近代主義を引き出していた）。

②毛沢東の論文「体育の研究」から、旧説の「自覚的能動性」ではなく、「法則性への意志」を導き出したこと。この新しい視点によって、毛沢東の思想的発展を「進歩的ロマン主義」からマルクス主義的な「主観能動性」へと捉える新たな視座が可能となった。

③旧説のパウルゼンを「新カント派の哲学者」と見る見解を、ドイツ語原典であるパウルゼンの著作・伝記にあたって完全に覆し、新アリストテレス学派の認識論にたつヒュームの「経験論者」と規定した。この新発見によってパウルゼン著『倫理学原理』の毛沢東への影響も、旧説の「玉石混淆の唯物論」、「観念論」、「主義主義」といった諸点ではなく、「ロマン的個人主義」・「現実主義」であったと結論づけた。

④毛沢東はパリ講和会議後の「強権の世界」を「民衆の大連合」によって打倒しようとするが、旧説のようにこれをマルクス主義的思想と見るのではなく、「進歩的ロマン主義」と規定した。マルクス主義的分析方法から完全に離脱している点が卓抜である。

⑤毛沢東の「女性解放論」についての先行研究はあるが、新聞に掲載された「論争」の詳細な「経過分析」はこれまでに、全く成されていない。この新しい分析視角によって毛沢東の「女性問題」解決の思想の「全面的かつ急進性」が明らかにされた（文化大革命につながる毛沢東の思想の一つの原点が明らかにされた）。

⑥湖南自治運動の中における毛沢東のリアリズムと「大同」という未来のユートピアニズムとの結合を「進歩的ロマン主義」と捉えたこと。

総じて「進歩的ロマン主義」という観点から初期毛沢東を捉えたことによって、従来の硬直した毛沢東像から完全に離脱している点が高く評価される。またパウルゼンについて通説を完全に覆したことは初期毛沢東研究の画期的発見で学会を驚かせたものである。また内外の資料、学説をよく網羅していることは優れている点であろう。

なお本論文の問題点を挙げるなら、本論文がいずれも枚数制限のある『筑波法政』に発表されたものを基礎としており、叙述をもう少し詳細に、綿密に論を展開しても良かったと考えられる。とくに従来の学説である「マルクス主義的アプローチ」、「伝統思想的アプローチ」について詳細に論じたほうが、「進歩的ロマン主義」の視角をより鮮明に浮かび上がらせることが出来たであろう。しかし本論文はそのような「問題点」を補って余りある優れた論考であって、十分に博士号を与えるだけの価値をもった業績と判断される。

よって、著者は博士（法学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。